



今日から始める
自然観察

冬のチョウは どんな姿？



ながはた よしゆき
永幡 嘉之
自然写真家
日本チョウ類保全協会
理事

冬にはチョウをほとんど見かけなくなりますが、卵、幼虫、蛹、成虫といろんな姿で、冬の寒さに耐えています。その暮らしぶりを覗いてみましょう。

卵

卵で越冬する主なチョウ
ウスバシロチョウ
アカシジミ
ミドリシジミ
ウラギンスジヒョウモン



例 ウスバシロチョウ

成虫は晩春に草などに産卵します。卵で冬を越すことは、幼虫が春に食草ムラサキケマンの芽吹いたばかりの新芽を食べる習性につながっています。

成虫

成虫で越冬する主なチョウ
ウラギンシジミ
キタキチョウ
キタテハ
ルリタテハ



▲キタテハが越冬していた切り株



例 キタテハ

食草はカナムグラ。ススキなどの枯れ草の中や、枯れ木の空洞（上写真）などに隠れて越冬します。翅を閉じると、裏側は見事な保護色になっています。



例 ウラギンシジミ

市街地の周りにも普通にいて、生け垣などの常緑樹の葉の裏で冬を越します。薄暗い時間に電灯の光に照らされると、銀色がよく目立ちます。

寒い冬にも、野外には多くのチョウの生命が息づいています。モンシロチョウなら、春に見られるのと同じ数の蛹が、人目に付かない場所ので、ひっそりと春を待っているはず。成虫や幼虫で越冬するチョウも、寒い日には何も食べず、葉の裏や草むらのなかでじっとしています。

チョウは卵から成虫まで、さまざまな姿で冬を越し、その方法は種ごとに決まっています。例えば、モンシロチョウに代表されるシロチョウ科では、モンシロチョウやツマキチョウは蛹、モンキチョウは幼虫、そしてスジボソヤマキチョウは成虫で越冬します。アゲハチョウ科では大半が蛹で冬を越しますが、ウスバシロチョウは卵で越冬します。冬越しの方法は、そのチョウの長い進化の歴史の中で出来上がったきたものです。

越冬中の成虫を見つけることは難しく、よく見かけるキタテハでさえ、秋に多かった川原などで探そうとしても、まず見つかりません。以前、太い枯れ木を割ったところ、空洞になった内部から冬越し中のキタテハが出てき

種ごとに違う冬の越し方

[写真] 1、4、5、6、7、8：永幡嘉之 2、11、12：佐々木幹夫
3、9、13：田中和良 10：中村康弘



例 オオムラサキ

幼虫は食樹エノキの根際の枯れ葉の裏に潜む。近縁のゴマダラチョウも同じ場所で見つかるが、やや大型で背中突起が3組（オオムラサキは4組）。



例 ベニシジミ

田畑のあぜや堤防によくいる。幼虫はスイバの葉を、表面だけ透明に残して食べ、根際などに潜んでいる。スイバの葉に浮かぶ半透明の穴が、幼虫がいる目印。



観察ポイント

オオムラサキやゴマダラチョウの幼虫は、必ず食樹エノキの根元に見られます。ゴマダラチョウは公園にも普通にいるので、まず落ち葉や枝ぶりから、エノキを見つけるのが早道です。冬は何も食べずに過ごし、春に再び若葉を食べ始めます。

幼虫

- 幼虫で越冬する主なチョウ
- ヤマトシジミ
 - ツマグロヒョウモン
 - コムラサキ
 - ヒメウラナミジャノメ



例 ツマキチョウ

春に育った幼虫は、晩春には蛹になり、そのまま夏・秋・冬を過ごします。身近な草むらににいるのに、蛹は背景の草に巧みに溶け込んで、探してもまず見つかりません。



観察ポイント

動けない蛹は外敵に見つからないよう、とても巧妙に身を隠します。幼虫が庭のミカン科の葉で育つアゲハチョウの仲間さえ、蛹はなかなか見つかりません。もし秋に幼虫を見た木が分かっていたら、食草ばかりでなく、周辺の壁や軒先を根気よく探せば蛹が見つかることがあります。

蛹

- 蛹で越冬する主なチョウ
- アゲハ
 - アオスジアゲハ
 - モンシロチョウ
 - ルリシジミ



QUIZ

左の写真は、越冬しているムラサキツバメというチョウです。何匹の成虫がいるでしょうか。

ヒント：みんな翅を閉じて集まっています。

▶ 答えは35ページ

て驚いたことがあります。人目につかない奥まった場所は、外敵の目を避けるばかりでなく、風や雪、そして急激な気温の変化からも身を守ってくれる空間なのだとなりました。

冬の散歩道で、運の良い人なら、生垣で越冬するウラギンシジミの姿を見つけることができるかもしれません。